

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K00458

研究課題名(和文)「公共空間」としての図書館の先進的研究

研究課題名(英文)Advanced Research on Libraries as Public Spaces

研究代表者

久野 和子(Kuno, Kazuko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：80635524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、デジタル時代における物理的な場としての図書館の多様な機能と可能性について、実際の現場でのフィールドワークに基づいた実証研究とともに、国内外の先進的な図書館学、社会政治学の文献をもとにした理論的考察をおこなった。その結果、貧困や社会的排除、社会的孤立など課題の多い現代社会において、あらゆる人々が集い、自由・平等で主体的な活動ができる安心・安全な居心地良い「第三の場」(優れた良き公共空間)としての図書館の有する新たな社会的、教育的、文化的価値と重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

あらゆる人びとが集う安心・安全で文化的な公共空間である図書館は、社会関係資本(信頼に基づくつながり)を効果的に醸成し、地域社会の民主的コミュニティの構築や活性化、社会的包摂に貢献しうる。さらに、個人における社会的孤立や情報格差の解消、情報リテラシーの育成、文化的体験や相互扶助等がもたらされ、住民の豊かな生活を支える。本研究は、国内外の先進的な事例を検証することによって、こうした場としての図書館の価値と力を明らかにするとともに、その公共空間は「公共圏」「第三の場」「公的領域」を具現化するものであることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：This study conducted empirical research based on fieldwork at actual sites and theoretical considerations based on advanced library science and socio-political literature at home and abroad on the various functions and possibilities of libraries as physical places in the digital age. As a result, we clarified the new social, educational, and cultural values and importance of libraries as a safe, secure, and comfortable "third place" (an excellent and good public space) where all kinds of people can gather and engage in free, equal and independent activities in today's society, which faces many challenges such as poverty, social exclusion, and social isolation.

研究分野：図書館情報学

キーワード：場としての図書館 学校図書館 公共図書館 公共空間 第三の場(サードプレイス) 公共圏 居場所 社会関係資本(ソーシャルキャピタル)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) インターネットが普及し始めた 1990 年代においては、情報資源のデジタル化、オンライン化が進み、電子図書館構想とともに図書館消滅論が提唱された。しかし、21 世紀を迎えるころになると、欧米では大学図書館や公共図書館の増改築や新築が相次ぎ、現場では図書館という物理的な場への利用者満足度を高めることが求められた。そうした中で、あらゆる人びとが集う「公共空間」としての図書館の価値と機能が広く注目されるようになってきた。

(2) 昨今では、さらに生成 AI (人工知能) 等による大変革が起きているが、もはや物理的な場としての図書館の存在意義が問われることはほぼなくなっている。むしろ、地域コミュニティにおける協働的・文化的・創造的な「公共空間」として図書館が持ちうる新たな可能性に多くの期待が集まっている。貧困、格差、孤立、社会的排除、民主主義の衰退など多くの課題を抱える日本社会において、誰でも気軽に無料で利用でき、自由な学びや読書、他者との出会いのある図書館という場が価値を増し、人びとに求められている。

(3) 日本でも滞在型の新しいタイプの図書館が続々と誕生しており、ジャーナリストや現場職員による様々な実践例や現場報告はいくつも見受けられる。しかし、理論的な分析や解釈において不正確、不十分な部分が多々あるため、専門的な学術研究による議論や調査分析が必要である。それは持続的な図書館の進展と新たな価値の理論的基盤を形成することとなる。

(4) アメリカでは従来の伝統的図書館研究の枠を乗り越えようとする新世代の研究が生まれている。ウィーガンドラが中心となって、これまで図書館研究において中心的な研究課題ではなかった「場」と「読書」に焦点を当てるとともに、利用者の日常生活という広い視座から考察した批判的、学際的な研究である。また、日本での認知度は低いが、現在のデジタル社会、社会的格差・分断社会、孤立社会における場としての図書館の役割と価値を解明するうえで有用な研究理論・方法である。

2. 研究の目的

(1) このような背景を踏まえて、本研究は新世代の図書館研究の批判的視座と学際的な分析概念を採用し、都市論や公共哲学における「公共性」論をもとに、地域社会の「公共空間」としての図書館の機能・役割について理論的に解明する。

(2) 課題の山積する現代日本において、図書館が地域の開かれた協働的・文化的・創造的な「公共空間」として、文化的価値や社会的・政治的機能を有し、地域コミュニティの活性化や社会関係資本の創出、平等で公正な市民社会の強化に貢献しうることを実証的に明らかにする。

(3) 学校図書館も開かれた公共空間を有しており、公共図書館と同様に、生徒や教職員、地域住民などの相互の出会いと交流の場として機能し、多くの個人的利益と社会的効用をもたらしうること明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 誰にでも開かれた公共図書館は、社会的相互作用、交流とつながり、コミュニティを育む場と機会を提供し、市民社会および民主主義社会の基盤を形成しうる。そのような図書館運営と環境的、制度的整備はとりわけ北欧諸国などで進んでいる。したがって、本研究では主に北欧の図書館視察と研究成果にもとづき、理論的、実証的な研究をおこなう。また、日本の先進的な公共図書館も視察し、その可能性を探る。研究においては、批判的視座と学際的理論を積極的に取り入れ、新世代の図書館研究を目指す。

(2) 日本では、地域に開かれたコミュニティスクール、別室登校、放課後学習支援、居場所づくりなどで、学校図書館の有する公共空間が活用されはじめている。地域住民やボランティアにも開かれ、学級や学年、学校の枠を超えた様々な出会いと交流を生み出す学校図書館という教育的、文化的公共空間の機能と価値について、フィールドワークに基づいた現状分析と考察を批判的視座と学際的理論を適用しておこなう。

(3) 近年の図書館の変貌と新たな意義、そしてこれからの可能性を深く認識・理解する上で、歴史を省察することは有用である。研究分担者の川崎は主に歴史研究を担当する。

4. 研究成果

COVID-19 による海外渡航規制などにより、当初予定していた海外の先進的図書館でのフィールドワークがほとんど実施できなかった。しかし、渡航規制前にフィンランドの公共図書館および韓国の公共図書館と学校図書館への視察を実施していたため、ある程度の知見を得ることができた。そうした知見とつながりを最大限に活かし、公共図書館については、海外の研究者と連絡を取りながら主に文献に基づいた理論研究を進め、学校図書館については研究活動の受け入れ可能な時期と学校に絞って、国内でフィールドワークを実施した。本プロジェクトの研究成果を5項目に分けてまとめる。

(1) 海外の研究協力者らとの情報交換と先進的研究成果の紹介

2017年度は研究協力者オーボらのプロジェクトの代表的な論文を翻訳し、連携研究者との共著書『トポスとしての図書館・読書空間を考える』(松籟社、2018)に掲載し刊行した。この論文は、図書館という多元的、複合的な出会いの場としての機能を分類し、データの数値化によって全体像を分かりやすく整理した画期的な研究である。

2022年度には、研究協力者も参加した北欧の大型研究プロジェクトの研究成果をまとめた論文集を研究分担者の川崎らと共同で翻訳し、『デジタル時代における民主的空間としての図書館、アーカイブズ、博物館』(松籟社、2022)として出版した。北欧の図書館は多様性の尊重と社会的包摂、情報のデジタル化が日本よりも進んでいる。本書は、その制度的課題と他の社会教育施設との関連、他国との比較、場としての図書館がもたらす様々な体験と交流などを、多角的、実証的に検討しており、日本の図書館がこれから立ち向かうであろう様々な課題と目指すべき方向性が示唆されていると考える。

(2) 新世代図書館研究としての「場としての図書館」の研究

学校図書館

久野はこれまで「第三の場」としての学校図書館について研究をおこない、数々の論文を発表し、講演をおこなってきた。それらの研究成果を総括し、単著の研究書『「第三の場」としての学校図書館：多様な「学び」「文化」「つながり」の共創』(松籟社、2020)を刊行した。日本では学校・家庭・地域の教育力の低下、受験競争、経済的・教育的格差の拡大、子どもの貧困、いじめ、虐待など子どもを取り巻く環境が厳しさを増している。その中で安心・安全で居心地良い子どもの居場所づくりが強く求められている。本研究は学校図書館が良き居場所となれる可能性と潜在力、また学校図書館が創出すべき良き居場所のあり方とその意義・役割を検討考察するにあたって、以下の3つの概念・理論を採用し、学際的、批判的の学校図書館研究を試みた。

- ・社会学者レイ・オールデンバーグが提唱し、現在多くの分野で注目されている良質な公共的な居場所を表わした概念である「第三の場」
- ・ウィーガンドによって提唱された「場としての図書館」研究における新世代の図書館研究理論・方法
- ・教育哲学者ジョン・デューイの説いた「新教育」の理論・概念

すなわち、自由で多様な出会いと交流のある公共空間(ひろば)としての学校図書館が、生徒の良き「第三の場」となることで、学校・地域コミュニティ、生徒の文化活動や交流活動を活性化し、信頼に基づいたつながり(社会関係資本)と生徒の文化資本を効果的に醸成できることを実証的、批判的に明らかにした。またそれは格差是正や学習権の保障にもつながり、生徒の日常生活と人間的成長を支え、他者との協働・共生という貴重な体験と学びをもたらすことに貢献すると考察した。

公共図書館

家庭や地域のつながりが衰退し、社会的孤立や分断が大きな社会問題となっている現代日本社会において、公共図書館は地域活性化・コミュニティ形成の拠点として機能することが求められている。すなわち、住民の生活や学びを支え、次世代の市民を育成するための教育・学習・文化活動の場としてのみならず、あらゆる人びとが直接顔を合わせ、多様な出会いと交流を生み出し、地域や個々人の課題について話し合い協働で解決する「公共空間」として機能することが、これからの公共図書館の新たな使命であり、重要な役割である。そうした理念のもと運営されている図書館は北欧などの海外のみならず、国内でも近年散見されるようになった。COVID-19のために多くの図書館視察はできなかったものの、フィンランド、韓国、国内の先進的図書館をフィールドワークし、「第三の場」の概念を基盤に、新たな図書館のあり方を見出し、その個人的・社会的な意義などをいくつかの論文で論じた。また、講演会や司書の研修会などで「第三の場」としての図書館の要件と特徴を具体的に提示し、特にこれまで図書館が禁止してきた「会話」と「遊び」を奨励する空間づくりと環境整備、共通認識が今後必要であることを説き、啓発に努めた。

新世代の研究「場としての図書館」の先行研究批判

図書館という場所と空間についての先進的な研究である「場としての図書館」研究がアメリカで誕生しておよそ20年が経ち、その評価が高まりと広がりを見せる中で、これまでの業績を振

り返り、一定の学術的評価と展望を示す研究史が期待されている。本研究では、その序説として、ウィーガンドの業績を中心に辿り、研究の到達点を明らかにするとともに、「第三の場」を概念枠組みとした研究に焦点を当て歴史を振り返り、研究論文を発表した。

(3) 「公共空間」についての先端的学術理論にもとづく図書館研究

2021年に論文「『社会的インフラ』としての図書館：アーレントの「公的領域」論に基づいた考察」(研究分担者らとの共著『図書館の社会的機能と役割』(松籟社、2021)に掲載)を著した。社会学者クライネンバーグが近年提唱する「社会的インフラ」としての図書館という魅力的な枠組みに注目し、政治哲学者ハンナ・アーレントの公共性論がそれに多くの示唆と論拠を与えてくれることを指摘した。アーレントの思想における「公的領域」「アゴラ」「複数性」「現われの空間」をキーワードとして、「社会的インフラ」としての図書館を検証し、公共図書館が持ちうる自由・平等な「公的領域」としての優れた特性と可能性を具体的に例証した。本研究によって、社会関係資本を醸成する物理的な場としての図書館の社会的・政治的役割と価値にたいして、新たな視点と意義、学術的な厚みを与えることができたと思う。

(4) 図書館史研究

研究分担者の川崎は開架制と児童サービスの空間構成に着目した研究論文やアメリカ公共図書館思想史についての研究論文を発表した。また、ウィーガンドの『アメリカ公立学校図書館史』の翻訳書(松籟社、2021)を刊行した。本書は、学校図書館を探求する視座として、批判理論、読書研究、場の理論を組み込むとともに、アメリカで初めての通史的、包括的な学校図書館史の研究書であり、アメリカと日本の学校図書館研究に新たな地平を開いた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 久野和子	4. 巻 69(10)
2. 論文標題 学校図書館、公共図書館における子どもの心身の居場所としての役割と意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こどもの図書館	6. 最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野和子、小松尚、須賀千絵、岩佐明彦	4. 巻 138 (1771)
2. 論文標題 図書館はどこまで開くのか? : 屋根のある広場の可能性と限界	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 1590
2. 論文標題 コロナ禍での居場所としての学校図書館	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書館教育ニュース	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 1290
2. 論文標題 子どもたちの良き「居場所」（= 第三の場）としての学校図書館の役割	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書館教育ニュース	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎良孝	4. 巻 31
2. 論文標題 『図書館の権利宣言』および解説文の歴史と現在 : 全面的検討の時代 : 2015-2020年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社図書館情報学	6. 最初と最後の頁 96-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 71(6)
2. 論文標題 図書館を「サードプレイス」ではなく「第三の場」に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書館界	6. 最初と最後の頁 311-311
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 342(CA1963)
2. 論文標題 ヘルシンキ中央図書館“Oodi”の機能・理念とその成果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 カレントアウェアネス	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 626
2. 論文標題 「第三の場 (サードプレイス) としての図書館」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域開発	6. 最初と最後の頁 p.4-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 1462
2. 論文標題 良き「居場所」(= 第三の場)としての学校図書館	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 図書館教育ニュース	6. 最初と最後の頁 p.2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 1
2. 論文標題 あらゆる人々の生活と学びを豊かにする「第三の場」としての図書館	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平成30年度奈良県図書館研究大会資料集	6. 最初と最後の頁 p.1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎良孝	4. 巻 70(5)
2. 論文標題 ボストン公立図書館の利用規則と年齢制限が示す意味: 1853-1875年	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書館界	6. 最初と最後の頁 p. 586-601
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 111(10)
2. 論文標題 子どもたちの『第三の場』としての学校図書館・公共図書館	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 図書館雑誌	6. 最初と最後の頁 656-659
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 20
2. 論文標題 『文化センター』としての学校図書館	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校図書館学研究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久野和子	4. 巻 1462
2. 論文標題 良き「居場所」(=「第三の場」)としての学校図書館	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 図書館教育ニュース	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎良孝	4. 巻 69(3)
2. 論文標題 アメリカ公立図書館と開架制：開架制導入前史	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 図書館界	6. 最初と最後の頁 170-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎良孝	4. 巻 69(5)
2. 論文標題 アメリカ大都市公立図書館での開架制の導入：クリーヴランドとミネアポリスを中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 図書館界	6. 最初と最後の頁 272-287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎良孝	4. 巻 27
2. 論文標題 アメリカ公立図書館と開架制論議(1890年代)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 同志社図書館情報学	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎良孝	4. 巻 69(6)
2. 論文標題 アメリカ大都市公立図書館での開架制の進展：パツファローとプロヴィデンスを中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 図書館界	6. 最初と最後の頁 340-356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 子どもの居場所としての学校図書館
3. 学会等名 こつべ子ども文庫連絡会・神戸図書館ネットワーク（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 デジタル社会における「場としての図書館」に求められるもの
3. 学会等名 福井県図書館関係職員研修会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 地域のつながりと、生活を豊かにする場としての図書館
3. 学会等名 デザイン・クリエイティブセンター神戸・神戸市立三宮図書館連携事業（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 「第三の場」としての学校図書館：多様な「文化」「学び」「つながり」の共創
3. 学会等名 但馬地区学校図書館協議会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 「第三の場」としての学校図書館：拡張的学習へのつながり
3. 学会等名 活動理論学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 「第三の場」としての学校図書館：多様な「文化」「学び」「つながり」の共創（1）
3. 学会等名 滋賀県教育委員会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 「第三の場」としての学校図書館：多様な「文化」「学び」「つながり」の共創（2）
3. 学会等名 滋賀県教育委員会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 学校図書館の文化的な意義と役割：「第三の場」としての図書館が創出する「文化・交流センター」機能～「学習センター」「情報センター」「読書センター」に続く新しい学校図書館機能の提案～
3. 学会等名 第10回京都国際図書館フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 文献レビュー：ロス論文「頂点に立つ読者」
3. 学会等名 第10回京都国際図書館フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 公共図書館は「第三の場」たりうるか
3. 学会等名 岡山県図書館協会 岡山県図協セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 図書館という「場」の社会的意義と役割 ～こんなに図書館が役立つなんて！～
3. 学会等名 神戸女子大学公開市民講座
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 第三の場としての図書館
3. 学会等名 香川県図書館大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 地域住民の生活と学びを豊かにする「第三の場」としての図書館
3. 学会等名 三重県図書館協会総会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 あらゆる人々の生活と学びを豊かにする「第三の場」（サードプレイス）としての図書館
3. 学会等名 奈良県図書館研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 第三の場としての図書館、学校図書館
3. 学会等名 第47回(平成30年度)子どもの本を学ぶ講座(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久野和子
2. 発表標題 文献レビュー『現代の図書館・図書館思想の形成と展開』
3. 学会等名 第8回京都国際図書館フォーラム(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 ラグナー・アウダンソン、ハイルビヤ・アンドレスン、セシリ・ファーゲリッド、エリック・ヘニングスン、ハンス・クリストフ・ホーボム、ヘンリック・ヨカムスン、ホーコン・ラーセン、トーニャ・ヴォルト 編著；久野和子監訳・訳；川崎良孝、松田ユリ子、三浦太郎、山崎沙織、鎌田均訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 354
3. 書名 デジタル時代における民主的空間としての図書館、アーカイブズ、博物館	

1. 著者名 川崎良孝、塩見昇、三浦太郎、中山愛理、杉山悦子、金晶	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 255
3. 書名 公立図書館の思想・実践・歴史	

1. 著者名 久野和子、川崎良孝、福井佑介、三浦太郎、杉山悦子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 207
3. 書名 図書館の社会的機能と役割	

1. 著者名 アメリカ図書館協会知的自由部、川崎良孝、福井佑介、川崎佳代子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本図書館協会	5. 総ページ数 361
3. 書名 図書館の原則：図書館における知的自由マニュアル(第10版)	

1. 著者名 久野和子、川崎良孝、吉田右子、福井佑介、三浦太郎、杉山悦子、安里のり子、	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 289
3. 書名 図書館研究の回顧と展望	

1. 著者名 久野和子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 209
3. 書名 「第三の場」としての学校図書館	

1. 著者名 川崎良孝・吉田右子・福井佑介・山崎沙織・三浦太郎・金晶・キャサリン・シェルドリック・ロス	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 267
3. 書名 図書館と読書をめぐる理念と現実	

1. 著者名 吉田右子, 小泉公乃, 坂田ヘントネン亜希	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 258
3. 書名 フィンランド公共図書館 : 躍進の秘密	

1. 著者名 久野和子、川崎良孝、吉田右子、福井佑介、山崎沙織、中山愛理、金晶、周卿、スバンヒルド・オーボ他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 269
3. 書名 トポスとしての図書館・読書空間を考える(シリーズ「図書館・文化・社会」1)	

1. 著者名 川崎良孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都図書館情報学研究会	5. 総ページ数 279
3. 書名 開かれた図書館とは: アメリカ公立図書館と開架制	

1. 著者名 吉田右子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 252
3. 書名 オランダ公共図書館の挑戦	

1. 著者名 川崎良孝、高嶽裕樹	4. 発行年 2017年
2. 出版社 京都図書館情報学研究会	5. 総ページ数 207
3. 書名 図書館・人権・社会的公正	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ノルウェー共同研究については、コロナのため現地調査や会合などは実施できなかったが、電子メールで情報交換をおこない、研究論文の翻訳をして、研究書として刊行し、最新の研究成果を日本に紹介した。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川崎 良孝 (Kawasaki Yoshitaka) (80149517)	京都大学・教育学研究科・名誉教授 (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	吉田 右子 (Yoshida Yuko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ノルウェー	Oslo Metropolitan University			